青梅市文化財ニュース

第１８２号

平成１４年１２月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

（青梅市駒木町 1-684 ℡0428-23-6859）

除　夜　の　鐘

さまざまな出来ごとがあった平成１４年もあと少しで暮れようとしています。去り行く年を送り、迎える年の年頭に言祝（ことほ）ぎ、喜び合う習わしとして大晦日の晩から新年にかけて除夜の鐘を打ち鳴らします。青梅市内でも、あちこちの寺院から、ゴォーン、という鐘の響きが聞こえてきます。鐘の音に、その年の災禍をすっかり消してもらい、新しい年に希望を託したいという思いは昔も今も変わりません。

除夜の鐘は、人間の心身にまといついた煩悩を打ち消すために撞くものだといわれています。「百八つ」の煩悩とは何でしょうか。これには諸説があるようです。「しくはっく」の苦しみ、という言葉から、四九（しく）＝３６と、八九（はっく）＝７２の両方を合わせると、１０８という数になるからだという説もあるようです。しかし、「しくはっく（四苦八苦）」という漢字からすると、掛け算とは無関係なような気もします。

仏教学辞典（１９７２年　法蔵館刊行）にも諸説があるとされていますが、そのうちの一つを参考に紹介してみたいと思います。人間には、色（物質）・声・香・味・触・法（教え）をつかさどる眼・耳・鼻・舌・身・意（心）という６つの感覚器官があります。つぎに、たとえば食物であるリンゴが眼に映ったときその反応は、好き・嫌い・どちらでもないに分類され、これを好・悪・平といいます。好・悪・平という３つの心がそれぞれの器官に生じることから、６×３で１８の心が生まれます。さらにその一つ一つに「染（我が強い）」と「浄（とらわれない）」という２つの心があって、これらには過去・現在・未来という３つの時が加わります。以上を掛け合わせて、１８×２×３で１０８というのだそうです。

太平洋戦争中の昭和１９年４月に国から金属類の一斉供出が指示されました。寺院にも梵鐘の供出令が下されました。江戸時代前期の寛永年間（１６２４～１６４４）以降に鋳造されたもの、歴史的美術的価値の少ないものは、すべて供出するようにという内容のものでした。青梅市内の寺院の多くが供出を余儀なくされましたが、根ヶ布の天寧寺、天ヶ瀬の金剛寺、成木の安楽寺、高水山上の常福院、塩船の観音寺、今井の薬王寺の鐘は供出を免れまし

（裏面につづく）

た。これらの鐘は今も現役の鐘として活躍しています。

毎年、大晦日には多くの人たちが寺院に詣でて鐘を撞きますが、その中には戦争中に供出したため、戦後になって新しく作ったものもあります。大晦日の夜は日付が変わるころから各地の寺院で鐘を鳴らし始めますが、誰にでも撞かせてくれるところ（その数を１０８回にはこだわらずに来た人の人数に合わせて撞かせてくれるところもある）と、一般の人には遠慮してもらっているところがあります。百八つの煩悩を払い、新しい年が平和で明るい話題が多い年であることを願って除夜の鐘を撞きに出かけられてはいかがでしょうか。鐘を撞いたあとに甘酒を振る舞っていただけるところもあるようですが、底冷えのする寒気の中でいただく熱い飲み物は心身を暖め、新しい年への活力を与えてくれるように思えます。

（文責　棚橋　正道）